

2012年12月6日
於 筑波大学筑波キャンパス

農業・農村地理学の調査・研究手順
ー富山県黒部川扇状地からの発想ー

田林 明（筑波大学）

この報告では、農業・農村の地域調査の方法とデータの収集の仕方について、富山県黒部川扇状地において1970年代に実施した報告者の農村変貌の調査を中心に検討した。事例とした入善町浦山新地区では、1964年から1970年にかけて圃場整備事業が実施され、農村は大きく変貌した。それを的確に捉えるために、主として農村景観と就業構造に着目した。土地区画の整備・拡大、農業用水路や農道の改善、耕地の集団化が進み、それによって農業機械が導入され水稲作は省力化された。しかし、チューリップ球根栽培や酪農を中止する農家が多く、農業部門は水稲作に限定されるようになった。そして、世帯主やその妻まで、扇状地内外の企業や役所・団体に恒常的に勤務するようになった。地域調査の際に最も重要なことは、地域の現象の基本的方向性についての的確なイメージをつかむことであり、そのためにはキーパーソンに対する時間をかけた丁寧な聞き取りが不可欠である。キーパーソンを見つけること、その人から有効な情報を引き出すことが、地域調査成功の鍵となる。さらに、得られた地域イメージを実証するために、聞き取りやアンケート調査、観察をすることと、既存の地図や統計、資料、文献を集めることが必要となる。

この1970年代の黒部川扇状地の研究が、その後の報告者の研究にいかに関わりつぎ、展開していったかを整理した。すなわち、1980年代以降の黒部川扇状地農村のさらなる変貌の追跡や、日本の農村空間区分の研究、水稲作やチューリップ球根栽培、自立経営農家の研究、黒部川扇状地や日本の地域構造の検討、持続的農村や農業の担い手の検討、そして最近の農村空間の商品化や日本の地誌の研究につながっていった。1つの地域を丁寧に継続的に見ること、あるいはそのようなフィールドをもっていることは、農業・農村地理学を長年にわたって続け、多面的に展開していくために重要なことである。